

## トピックス

## イネカメムシの生態解明に取り組む

水稲の害虫「イネカメムシ」が、近年全国的に発生しており、兵庫県でもその被害が問題となっている。本種の生態は不明なところが多い。発生生態に応じた対策を検討するため、越冬場所の探索や行動観察を行ったところ、具体的な越冬地や本種の活動生態が明らかになってきた。

## 内容

イネカメムシは、イネの穂を吸汁し斑点米被害をもたらすほか、出穂期の穂を吸汁すると不稔<sup>ねん</sup>（青立ち）となり減収につながる（写真1）。本種は1950年代以降、ほとんど見られなくなっていたが、近年再び発生が増加し、兵庫県内でも、その被害が問題となっている。

本種に関する知見は少なく、また古いものしかない。そのため、本種の生態は不明なところが多い。近年の多発の要因には、作型、品種の多様化等が考えられ、対策には水田環境における本種の発生生態に応じた対応が重要である。本稿では、2023年に関係機関と行った生態解明の取組について紹介する。

## 1 越冬場所の探索

イネカメムシは成虫で越冬することが知られているが、本県では具体的な越冬場所についてわかっていない。本種が多発した水田付近に越冬場所があると予想し、周辺を調査したところ、近隣の林縁部やイネ科雑草の群生地を越冬場所にしてきた（写真2）。

## 2 カメラを用いた行動観察

イネカメムシは、7月中旬ごろ突如として水田に現れる事例が各地で報告されている。しかし、越冬場所から水



写真1 イネの穂を吸汁するイネカメムシ成虫

田へ移動するきっかけや、その過程は不明である。そこで、イネカメムシ越冬成虫の行動観察を試みた。越冬地周辺の環境を模したプラスチックケース（写真3）内に放飼し、カメラの定時撮影機能を用いて5～7月の行動観察を行った。その結果、イネカメムシが夜行性であることや、飛翔活性が高くなるきっかけとして、6月下旬の顕著な気温上昇が関わっている可能性が認められた。

## 今後の方針

本種の活動生態に基づいた防除技術の検討に向けて取組を進めていく。

岩橋 祐太（病害虫部）

（問い合わせ先 電話：0790-47-1222）



写真2 イネカメムシの越冬場所を探す様子  
（左）水田周辺の林縁部 （右）イネ科雑草の群生地



写真3 越冬個体の飼育観察の様子  
（左）観察に用いたケース （右）活動性が高まり、穂に集まるイネカメムシ（2023年6月28日午前0時頃撮影）